
少年剣士(ロイド&ディーク)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年剣士（ロイド&デーク）

【Nコード】

N1532B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

某所で噂されていた、ロイド&デーク親子説より創りました。両方とも大好きキャラです。

その日、デイクは中々眠れなかった。

今頃は家に続く道を歩いているのだろうか。

あ、今すぐ前の角を曲がった（ような気がする。）そして・・・そして・・・

コンコン・・・ノックの音がした。

「はあい？」

高くて澄んだ声がする。（あれは母親の声だ。）

ガチャ・・・ドアが開いて・・・低い声がして・・・気がつくと布団を抜け出して、声のした方に向かっていた。

バン！と扉が勢いよく開けて、部屋の中を見ると、笑っている母親と、

そして少し驚いたような顔の男が自分を見ていて・・・。

「親父！」

明るい声と共に今までどこかに遊びに行っていたらしい元気の塊

（と形容するに相応しい息子）が自分に飛びついてきた。

「デイク！元気だったか？いい子にしてたか？」

息子の体を受け止め、優しく抱きしめつつ顔を見つめながら頭を撫でてやる。

息子がくすぐったそうに肩をすくめる。

デイクの父親であるこの男の名はロイド。

背はすらっと高くとび色の髪に緑がかった茶色の目、端正な顔つき。一方大人しく撫でられている息子の髪の色は母親と同じ綺麗な水色である。

ロイドの妻はエトルリア生まれの美しい女だ。

デイクが生まれたばかりの時、

彼女に、お前に似て綺麗な男の子になるだろうなと言ったら、その子はロイドに顔貌がそっくりじゃないと言い返して来た。

まじまじと今腕の中にいる大きくなった（と言ってもまだ幼いのだが）息子を見つめ、

やはり母親の勘は正しいと心の中でさり気なく苦笑した。

「当たり前だろ！」

それと、とデークは続ける。

「俺、前より強くなったぞ！」

「ふふ、そうか。それは良かったな。」

デークは大きくなるに連れて他の子に見られない優れた性質を表してきていた。

いつも朗らかで人見知りをせず、誰とでも友達になれた。

そして人の気持ちをいち早く察して気を遣ったり、

喜ばせようとする優しい心も持っていた。

それとは別に、彼には優れた才能があった。それは剣を扱う事だった。

優れた剣士である父に剣を教えてもらうようになり、

デークは目に見えて上達していた。

「親父に教わった事、毎日ちゃんと練習してるよ。早く親父みたいに強くなるんだ！」

父親は家に帰ってくる回数が少なかった。

母に言わせると色々と仕事が忙しいのだと言う。

悪い人を懲らしめるのが父さんのお仕事なのよと母は言うのだが、それ以上は教えてくれなかったのでいつしか聞くのをやめていた。

その代わりに父親が剣の達人だと知ったので、

子供心に彼に剣を教えてもらう事で納得していた。

自慢ではないが、ここらで、剣で自分に敵う子供はいないと自負している。

「ほう、そいつは偉いな。」

父親が感嘆を込めて肩眉を上げる。

「それで？強くなってどうする？」

父親がからかうように聞いてくるので元気いっぱいに答える。

「強くなつて、信頼できる仲間をたくさん作つて、
そいつらと旅をして色々な所を見て回りたいんだ。
だから今日・・・はもう夜だから無理だけど、明日は絶対稽古してく
れよな！！」

父親の腕から飛び降りて、ドアを開けながら言う。

「了解。」

「約束だからな！！」

振り向きざまにそう言い、後ろ手にドアを閉める。

布団に入ったらあれ程眠れなかったのが嘘のように眠れた。

そしてよく晴れた次の日の朝。

ダダダダツと慌ただしい足音が家中に響いて、
勢いよく食卓のある部屋のドアが開けられる。

「何だデイク、朝からそんなに慌てて。」

両親は既に起きていた。

父親はデイクの様子を見て笑うのを堪えながら

母親が用意したお茶を一気に飲み干すとテーブルの上に置いた。
その様子は何日、時には何十日も留守をしていたとは思えない。

「父さんがいなくなつたと思つた？」

洗いものをしている母親が、からかうように声をかけてくる。

父が家に帰ってきた時の母は、まるで少女のようだ。

母はしとやかな美しい容姿と相反して気の強く元気の良い人だ。

いつも陽気で、よく冗談を言ったりして、家の中には明るい雰囲気
が満ちている。

デイクは幼心にいつか母親のような明るくて元気な人を見つけら
れたらいいな、

と思つたりもする。

父は以前冗談っぽく、母に強く言い寄られた末に結婚したのだと言
っていたけれど、

母さんの性格なら十分あり得る。

でも、何だかんだ言いつつ結婚したのは、

結局は父も母の事が好きだったって事じゃないだろうか。

「別に。」

母親に向かってぼそつと呟いて、父親の正面に座る。

そつと父親の表情を伺おうとしたのだが目が合ってしまった。

「そんなに心配しなくても、しばらくいなくなりはせんさ。」

デイクはその言葉に少しだけ目を丸くしたがすぐに挑戦的な態度をとった。

「心配なんかしてねーよ！

俺はただ、剣を教えて貰えるチャンス逃がしたくねーんだ。」

「そうか。」

軽く笑い、それ以上追求せずにロイドは立ち上がる。

デイクは父親が母親の洗い物の手伝いをしに彼女の隣に立つのを、食べ物を頬張り、口を動かしつつ見守った。

生まれてこの方、この二人が喧嘩をしている所など見た事がない。

朝食から数時間後。

稽古が一区切りついた時（昼が大分過ぎた頃）、

父親にたまには一緒に散歩でもしてみないかと言われ、父と二人、色々な店を覗き込みながら人で賑わっている市場を通り過ぎた。

あちこちにある木陰やテントも、どこも人の波である。

走り回る子供たちやおしゃべりをしている若い娘やおばさんたち。彼らが住んでいる場所は広大なエレブ大陸の西に位置する、

大陸一華やかで高度な文化をほこる『エルトリア王国』。

その王都であるアクレイアだった。

さすがは王都と言っただけあって、美しい街並みと共に様々な店が揃い、

多くの人で賑わっている。

少し広い道には見事な馬を引かせ、
召使を従えた馬車が車の音も高らかに角を曲がって、
生垣の間の小道をかけていくのが見えた。

デイクは父親と歩いている間中、ロイドのいない普段の生活や、
母親につられて見に行った、

祭りで楽しい見世物を見た話などを身振り手振りで面白くやって見
せたりした。

そんなデイクを見つめるロイドの顔からは微笑が消えなかった。
子供らしいその声は可愛らしく、力強く晴れた空に響いた。

しばらく歩いた二人の目の前に現れたのは、アクレイアの闘技場だ
った。

一世紀前から80年の歳月をかけて作られたという巨大な円形闘技
場である。

今から決闘が行われるのだろうか、人が多く出入りしている。

「あ！親父、闘技場だぜ。」

目をキラキラさせながらデイクが言う。

ロイドは妻から”あの子、剣闘士に憧れてるみたいなの”と聞いて
いた。

「そうだな。行きたいか？」

息子の横顔を見ながら聞くと、デイクは意外にも首を振った。

「いいよ、別に。行こうと思えばいつでも行けるし。」

デイクとて行きたくないわけでは無かった。

ただ、父親と過ごす貴重な時間を闘技場などに使いたくなかったの
だ。

「そうか。」

「親父も、闘技場で戦ったりしたんだよな？」

「まあ、それなりにな。」

「強かったんだろ？」

「一応な。」

腕を磨くために闘技場へは随分若い頃から通っていた。負けは無い。

「そつかあ。剣闘士ってカッコイイよね。」

それを聞き、少し休むか、とロイドは闘技場が見える近くの石段に腰を下ろした。

そして、無邪気に闘技場を見つめながら目を輝かせている息子を見つめた。

だが、ロイドは一見華やかだと思われがちな闘技場の裏を知っていた。

闘技場とは掛け金を支払い、

出てくる相手と戦って勝てば賞金がもらえる施設である。

このエレブ大陸の各地にあり、

腕のたつものはここにこぞって集まり自らの腕を試そうとする。

そんな彼らを（特に剣士に限定せず）剣闘士と言っのだが、試合は命がけのものだった。

だから悪く言ってしまうえば殺し有りの見せ物場だった。

闘技場は市民の娯楽施設の一つだ。

だが、たとえ市民に対して娯楽を提供しているだけとしても、人が死ぬのを歓声上げて喜ぶ様子を見るのは複雑だ。（降伏するかすれば別だが。）

そして、闘技場の用途は腕試しだけではない。

公の場での人と猛獣（ライオンや闘牛やイノシシやトラ）

との戦いは今でもあるのだが、

昔は捕虜や罪人、または異教徒などが犠牲者にされた。

彼らを完全武装した剣闘士が死刑執行を行ったり、

お互いに殺し合いをさせられたり。

拳句の果てには動物の餌にされたり、

服に油を塗られて張り付けされ闘技場の中で燃やされたと言う。

やがてこのような形の公開処刑は無くなったが、

今でも腕を試そうとする者が少ない時には、

訓練された捕虜や奴隷が見世物の為に参加させられるという。

そう言った形で参加させられる多くの者達の人生は悲惨だ。

たった2、3回の戦闘で生きている者は極稀である。

しかし決闘に勝ち続けることができれば裕福な暮らしができ、自由を得て豪勢な暮らしをする事が出来た者も少なくはないようだが・・・

目の前の息子を見る。まだ、知らなくていい事だ。

ふと、闘技場とは関係ない事を口にする。

「お前の活きのいい所は、ライナスに似ているな。」

ロイドは、今はベルンにいるであろう弟ライナスを思い浮かべた。彼は威勢がよく活発で、

小さい頃（たまに今も）時々羽目を外してロイドの手を煩わせていた。

もしかして、ディークは大きくなったらライナスのようになるのだろうか・・・。

そんな楽しい想像がロイドの頭をよぎる。

ディークとライナスは数回会っただけだが、やはり気は合うようだった。

けれど、ロイドの言葉を聞いて、ディークは大げさにしかめっ面をする。

「ライナス叔父さんに？嘘だい！俺、叔父さんやジイちゃんほど大きくないぜ。」

「今はな。だがあいつは、最初は俺より小さかったが急に伸びた。お前も大きくなったらあれぐらいになるかもしれん。」

「ふん。ま、それならそれでいいよ。」

ディークは叔父ライナスを思い出し、まんざらでもなさそうに言う。父の弟である叔父は茶色い髪に細面の男らしい顔をしている。

とび色の髪に緑がかった茶色の目、

端正な顔つきをしている父親ロイドとは髪の色も目の色も違う。

そして性格も。叔父は（祖父もそうなのだが）とにかく体も声も大きくて豪快な人で、

自分の頭を大きい手でよく撫でてくれたのだった。

自分も男ならやはり大きくなりたいたいと密かに思っていた。そしてふと、祖父ブレンダンを思い浮かべる。

「なあ親父、ジイちゃんの事だけどさあ。」

「ん？」

年に1、2度、ディークがある程度大きくなってからは、祖父ブレンダンのいるベルンに顔見せに行っている。

その際に色々と父親の友人達にもお目にかかっていた。快活で明るいディークはどこに行っても可愛がられた。

「ジイちゃんて歴戦の勇者なんだろ？あの傷カッコイイよないかにも戦士つて感じで・・・」

ロイドの父ブレンダンには顔にも体にも、切られたような跡が数えるのが困難なほどついていた。

だがディークの言葉にロイドは表情を厳しくする。

「ディーク。」

「な、何だよ急に恐い顔して。」

「親父のあの傷は守りたい者を守る為に負った。」

だが、おかげで生死の狭間も彷徨う羽目になった。」

「！そうなんだ・・・。」

ロイドもブレンダンが傷を負った経緯を詳しく話されて知っている訳ではない。

だが、あの父親の性格を考えれば自ずと見えてくる部分がある。

「何かを守ろうとする時には常に自分と、

守ろうとする者の2倍分の危険が伴うからな。

憧れるのは構わんが、お前がそのような目に遭い、傷を負わないで済むよう祈っている。」

「親父・・・。」

「どうした、感動したか？」

「ばっ馬鹿言うなよ。あ、バアちゃんの事はどうなんだよ？

俺、ジイちゃんは知ってるけどバアちゃんはサカ人だったって事しか知らねーもん。」

俺が生まれる前に死んだんだよな。」

デイクがそう言うと、ロイドは懐かしそうな表情を浮かべた。

「そうだ。それと、母は確かに遊牧民だった。」

親父には勿体無いぐらいよく出来た人だった。

草原の民はウハイみたいによく語ることが好まないが、

その例に漏れず母も静かな人だった。」

ウハイ・・・と言う名前を聞いてその人物を思い浮かべる。

茶色い髪に顎鬚を生やしていて、その顎鬚がとても似合っている。

そう言えばサカの民族衣装を着ていた。精悍な顔つきをしている父の友人、仲間。

でも父よりは歳を重ねているように見える。

会ったのは祖父と同じ回数だけなのだけど

うん、確かにお喋りな人じゃない。

でも弓の腕は素晴らしくて、それに何度か一緒に馬に乗せてくれた。

「母は・・・お前を見たら喜んだだろうな。」

父親が誰ともなしに呟いた。

妻を紹介した時、父親ブレンダンは早く孫の顔を見せてくれと煩かった。

母はその時既にこの世の人では無かったけれど、

きつと父親と同じ事を言っただろう。

「えゝ、見てるんじゃないの？」

死んだ人の魂って生前結びつき強かった人の所に帰るんだろ？」

「お前、どっからそんな話を聞くんた。」

軽く揶揄するように言う。

ロイドは職業柄、死人に関して魂の事まで考えた事は無い。

死人は土に還る。それだけだ。だが・・・

「そうかもしれないな。」

「だろ？でもさ、親父もライナス叔父さんもサカ人には見えないよな。」

エトルリアではあまりサカの民と会話するような機会がないのだけ

れど、

サカの血を引いている人間はサカの容姿が濃く出るのだ・・・と聞いた事がある。

「親父の血の方が濃く出たんだろう。それは、お前にも言えるがな。」

「だよな。祖父ちゃん遺伝の力強そうだもん。」

あゝあ、俺、母さんによく親父に似てきたって言われるんだぜ？」

「そうか。ならお前はいい男になるぞ。」

「何言つてんだよ親父・・・。」

冷めた目をして見つめる息子に笑いかける。

「母さんが待つているからそろそろ帰るか。」

既に日は落ち星が姿をのぞかせている。

「うん・・・あつうわっ！」

不意にディークの体が浮き上がる。父親に抱え上げられたのだ。

「本当に・・・大きくなつたんだな。」

しみじみとしたように父親が声を漏らす。

「何しみじみしてんだよ！俺もうガキじゃねえよ！ガキ扱いすんなよな。」

照れくさいのを隠してぺしぺしと軽く父親の腕を叩く。ロイドはと言うと、

その言葉を聞いて笑いながらも息子を抱き寄せ、小さい頭を軽くこづいた。

「親父、いつまで家にいれるんだ？」

「2、3日つてとこか。」

やった！とディークは小さくガッツポーズをして、

ロイドの首にまだ細い両腕を回してく抱きついてくる。

その、無邪気に喜んでいる様子を見てロイドは目を細めた。

しばらくして家が見えてきた時、更にその表情が穏やかになる。

家の前で、妻が自分達を見て微笑みながら立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1532b/>

少年剣士(ロイド&ディーク)

2010年10月20日19時17分発行